

19 世紀半ばから現代に至るウィーンにおける都市空間と文学・芸術の総合研究

研究成果の報告

2025 年 9 月 30 日から 2026 年 3 月 22 日まで(実質滞在日)、オーストリアのウィーンで在外研究(短期)に従事し、3 月 23 日無事に帰国しました。その成果を以下にご報告申し上げます。

①ウィーンの現代作家・詩人たちとの交流

ウィーンの住居は閑静な文教地区にあるにあるショーペンハウアー通り (Schopenhauerstraße—同名の哲学者に因む)59 番地にあるマンションで、この所有者トーマス・クロース (Thomas Kloos) さんは、作家ミレーナ＝美智子・フラッシャー (Milena-Michiko Flasar) さんの旦那さんです。私は 2018 年にミレーナさんがドイツ語で書かれた小説 *Ich nannte ihn Krawatte* を日本語に翻訳した(邦題『ぼくとネクタイさん』郁文堂、2018 年)ご縁もあって、以来親しく交流させていただいており、今回も到着した当日からミレーナさんの朗読会に参加するなど、折にふれて会う機会がありました。ちょうどミレーナさんは、日本を舞台にした短編集 *Der Hase im Mond* (『月の中の兎』) を刊行したこともあり、その執筆の背景などを詳しく聞くことができました。この中には東日本大震災を舞台にした「ツナミ (Tunami)」という短編もあり、機会があれば日本語に訳したいと考えています。

もう一人の私の古い友人のレオポルト・フェーダーマイアー (Leopold Federmair) さんとも時々会いました。彼は長らく広島大学の教授を務めたドイツ文学者・翻訳家で、現在は奥さんのいる日本とウィーンを往復しながら、精力的にドイツ語で小説やエッセイを発表しています。ちょうど私の滞在中、彼は初めての詩集 *Ein Schrein auf dem Kaufhausdach—Shinto-Gedichte* (『デパートの屋上の神社—神道の詩』) を発表しました。この詩集の中には日本を題材にした詩も少なくなく、日本の伝統を深く理解しながらも、鋭い文明批判を展開しています。俳人の芭蕉が実は当時珍しかったバナナをペンネームにしたことをコミカルに歌った詩や、高層ビルの屋上でコメを植えていることを風刺した詩もあり、現代版の「ジャポニズム」というにふさわしい優れた詩集でしたので、私が所属している詩の同人誌 ERA の 26 号(2026 年 4 月刊)にウィーンのプラーターをテーマにした自作の詩「早春のプラーター」とともに「ウィーン発、新しいジャポニズムの詩の誕生——レオポルト・フェーダーマイアー詩集『デパートの屋上の神社』」というタイトルのエッセイを発表しました。4 篇の詩を日本語に訳し、簡単な解説を加えました。これはネットでも何度か取り上げるなど好評を持って迎えられました。

もう一人忘れてはならないのが作家のヴォルフガング・ヘルマン (Wolfgang Hermann) さんです。彼とは旧知の学者イングヴィルト・リチャードセン (Ingvild Richardsen) さんに紹介してもらいました(ミュンヘン在住のリチャードセンさんは明治大学でも何度も講演や出張講義「世界のキャンパスから」を担当していただいた女性解放運動と世紀末芸術の世界的な権威で、明治大学にもかかわりの深い方です)。実はヘルマンさんもかつて 2 年ほど上智大学で講師を務めたこともある日本通で、私の師でもあった故・神品芳夫明治大学名誉教授とも知り合いだったこともわかり、初めて会った日から 5 時間も話し続けるほど親くなりました。彼からも様々な小説を贈られましたが、最も感銘を受けたのは *Abschied ohne Ende* (『終わりのない別れ』) と

いう小説でした。これは最愛の息子を 17 歳で失ったどん底から、いかにして立ち直ったかという自らの体験を私小説風に描いた作品です。私がそこに日本の私小説、とくに太宰治の影響が感じられるというのをたいそう喜んでいました。これは感動的な作品ですので、ぜひ日本語に訳したいと考えています。

他にもウィーンで出会った作家や詩人に枚挙のいとまはありません。ウィーンではカフェで作家の朗読会が定期的に行われており、作家とじかに話し合うことができます。新作を発表するたびに、作家は朗読のツアーを行います。また *Alte Schmiede* (直訳すれば「古い鍛冶屋」) という文学・芸術の交流センターがあり、ここでは毎日のように作家の朗読や講演、演奏会などが開かれています。日本でもこのような習慣があれば素晴らしいのに、といつも思います。

さてウィーン滞在も残すところ僅かになったある日、日本から連絡があり、次期の日本オーストリア文学会会長という大役に私が任命されました。すでに日本独文学会の理事という重役も背負っていますので、時間的に務まるかどうか少し考えましたが、引き受けることにしました。ウィーンで得た知見や経験をもとに、日本のオーストリア文学研究の発展に尽力する覚悟です。この仕事はすでに今年の 5 月から始まっており、今忙しい毎日を送っています。

②大学図書館での研究・大学の講義聴講

さて大学での研究活動についても述べなければなりません。大学での研究は図書館が中心でした。その理由の一つは、私に招待状を書いてくださったウィーン大学教授のエーファ・ホルン (Eva Horn) さんが、ちょうど私の滞在中、他の大学へ長期出張中でウィーンにいなかったこともありますが、私も執筆中の著書、論文、学会誌の編集などで手いっぱい、大学の研究者たちと深く交流する時間はそれほどありませんでした。

大学でとくに頻繁に利用したのはドイツ文学専攻の図書館でした。ここは開架式になっており、ドイツ文学に関する書物だけで普通の公共図書館に匹敵する以上の蔵書があります。私は明治大学人文科学研究所の成果論文「20 世紀初頭のドイツ文学における南洋諸島のイメージーヘルマン・ヘッセからエーリヒ・ショイルマン、ノルベルト・ジャックまで」を、この図書館に会った資料を通して、大幅に加筆することができました。最終章で扱ったローベルト・ミュラーがウィーン出身だったので、日本にはない多くのミュラー研究書を閲覧できたのです。

大学の講義も聴講しました。2025 年 10 月に始まる冬学期は、シュトッカー教授の「反戦文学」(木曜)とヴォルフ教授の「オーストリア文化史——二つの革命」(火曜)のふたつの講義を聴講しました。とくに「反戦文学」の方は、これまで反戦文学の代表作と考えられてきたレマルクの『西部戦線異状なし』以外にも、ノーベル平和賞を受賞したベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てよ』に始まり、ハインリヒ・ベル、ヴォルフガング・ボルヒェルトら戦後の「瓦礫文学」から最近の作品に至るまで、戦争をテーマに多くの文学作品書かれていることを知り、その切り口の見事さも合わせて、今後の研究への新たな足がかりを与えられたような気がしました。「オーストリア文化史」を講じたヴォルフ教授とは、エリカ・ミッテラー協会の会合でも偶然お目にかかりました。

エリカ・ミッテラー (Erika Mitterer: 1901-2001) はウィーンを拠点に活躍した詩人・小説家で、若い頃にリルケと文通したことで有名です。私は故・神品芳夫先生の後任として 10 年ほど前から日本人の代表としてミッテラー協会のメンバーに名を連ねていますが、この会合に参加し

た時に思いがけない出会いもありました。スティルフリートの名乗る上品そうな老紳士が私に握手を求めてきました。その語るところによれば、彼の曾祖父は明治のころ横浜に来て写真館を経営し、写真家として長く滞在したそうです。後で調べてみると、確かにライムント・フォン・シュティルフリート (Reimund von Stillfried: 1839-1911) という高名な写真家があり、1869 年来日、明治政府の依頼の下で多くの皇族の肖像写真や日本各地の文化財を写真に収めていることが分かりました。しかもその重要さに比して、まだほとんど研究されていません。私はこの出会いをもとにスティルフリートを研究しようと胸を弾ませています。

ところで私の住んだマンションは先に書いたとおり、静かな住宅地にありましたので、集中して研究することができました。大学に行かない日は部屋にこもって勉強しました。朝はボブロフスキーの詩を 1~2 篇日本語に訳し、そのあとドイツ語で小説や論文を読みます。執筆は主に夜。もちろん、一日中勉強してるわけではなく、週に 3 回、早朝近くの Türkenschanz 公園を 50 分ほどジョギングします。日本でも続けているこの習慣が私の健康の源で、こうするとひどい肩こりも取れ、気分も爽快になるのです。ちなみにこの公園をジョギングするだけでも一生ウィーンに骨をうずめてもよいと思わしめるほど美しい景観に恵まれた公園で、池あり、古い塔あり、美しい森林ありで、早朝にはリスがかけっこをしていました。

ウィーンでのもう一つの大きな仕事は、日本独文学会の学会誌『ドイツ文学』の編集で、私は特集号「感染症と文学」の責任編集者でもあったので、折にふれ Zoom で日本にいる編集委員たちとの編集会議を主宰しなければならず、これに伴い多くの論文の査読や書き直しの依頼など、膨大なメールを書き、またそれに返答しなくてはなりません。もちろん私自身も長大は巻頭論文「ドイツ語圏文学とペスト」を書きました。この論文で特に力を入れたのがウィーンとペストのかかわりで、1683 年の最大のペスト禍をはじめ、古来 20 回以上も深刻なペスト禍に陥りながらもそれを乗り越え、シュテプター、ホーフマンスタールといったウィーンの作家たちは見事な文学作品にその体験を結晶させてきたのです。

2020 年にコロナウイルスは世界中を席卷し、それにつれて文学をめぐる考え方も大きく変わりましたが、2023 年 6 月 4 日明治大学で行われた全国学会で、私はシンポジウム「ペストとドイツ文学——ヨーロッパ文化史から再考する」を主宰しました。その結果がこうして学会誌の特集号の中心に置かれることになったわけで、来週あたりにようやくその号が刊行されるのを楽しみに待っているところです。

③ドイツ・マールバッハ文学資料館での研究

現在、私は科研費 C「ヨハネス・ボブロフスキーとサルマチアの詩学——ドイツ人と東欧諸民族の共生をめぐる文化史的研究」(2024~2028 年)の研究にも従事しています。ヨハネス・ボブロフスキー (Johannes Bobrowski: 1917-1965) は戦後ドイツの代表する詩人・作家ですが、旧東プロイセンのティルジット出身の彼は従軍の際に見た悲惨な経験——特にユダヤ人の大量虐殺——を記憶としてとどめることが自身の文学の使命だと自覚し、「サルマチア」という詩圏を構想しました。これは古代、黒海沿岸にいた遊牧民族サルマタイ民族に起因する語で、彼はドイツ(東プロイセン)を中心にポーランド、リトアニアなどのバルト三国、ロシア西部、ウクライナ、北欧までも包括する膨大な地域を「サルマチア」と呼び、軍事的な色彩を帯びた「地政学」に対抗する、諸民族の共生を目ざした「地詩学」ともいうべき文化的共同体として位置づけました。

私はパウル・ツェランと並んで30年ほど前からボブロフスキー研究に取り組んできましたが、ロシアのウクライナ侵攻をきっかけに「サルマチア」という詩圏が今後ますます重要になっていくと確信し、ボブロフスキー研究にも力を入れています。ウィーン滞在中は「ボブロフスキーとクロップシュトック」という論文を学会誌『世界文学』に投稿し、無事に採択されました。その号はまもなく(2026年7月)刊行されます。

さて、シュトゥットガルト近郊にある小都市マールバッハ(文豪シラーの生地)には、世界最大のドイツ語圏文学の図書館・資料館であるアルヒーフがあり、ここには書籍だけでなく、古い雑誌、映像資料や作家の手書き原稿までドイツ文学に関するあらゆる資料が保存・公開されています。私は2025年11月24日から29日に同資料館で資料収集に従事し、ボブロフスキーの貴重な遺稿(特に彼の手書き原稿やメモ)を調査することができました。これは2026年10月に岡山大学で予定してるボブロフスキーのシンポジウムの口頭発表にも生かす予定です。同資料館にはボブロフスキー研究の世界的権威であるヨッヘン・マイアー(Jochen Mayer)博士もあり、彼の懇切丁寧な助言を受けることもできたのは大きな収穫でした。

④ウィーンでの芸術体験

最後にウィーンでの芸術生活についても簡単に触れておきます。いうまでもなくウィーンは音楽の都であり、世界屈指のオーケストラと幾つものコンサートホール、オペラ劇場を有しています。私も研究の合間にオペラ鑑賞、クラシック音楽のコンサートを堪能しました。特に印象的だったのはシューベルトの『冬の旅』を歌ったバリトンのキーンリーサイドのリサイタルでした(2025年11月8日、コンツェルトハウス)。もちろんこれらは決して趣味ではなく、私の研究とも密接に結びついています。現在、朝日カルチャーセンターで「ドイツリートを読み解く」という講座を担当し、リートにテキストとして使われた詩人のテキスト(ゲーテ、ハイネ、アイヒェンドルフなど)を解説していますが、これには最新の音楽事情や演奏状況を知っておく必要があります。

またウィーンは音楽だけではなく、美術史美術館、ベルヴェデーレ上宮、アルベルティーナなど、世界有数の美術館を誇る都市でもあり、私はこれらの美術館の年間パスを購入して、緻密な研究を重ねました。

実際これらの知見を活かして、文学と美術を融合すべく「挿絵から読む文学」と題した催しを、数年前から明治大学リバティーアカデミーの公開講座で行っており、好評を博しているだけでなく、そこで行われた講演や対談を『教養論集』などに活字にして公表しています。

⑤最後に

以上述べたことはウィーンでの私の研究生生活のごく一部にすぎず、詳細な報告をするなら、この数倍の分量が必要になるので、残念ですがこの辺りでやめることにします。

最後に、このような機会を与えてくれた明治大学と事務の皆様には厚く御礼申し上げますと同時に、これらの経験を生かして、今後の研究に邁進していく所存でございます。

2026年6月27日 関口裕昭

